

せせらぎ 6月号

6月の映画会



上映時間 119分
6月26日(土) 午後2時から
筑西市立中央図書館 視聴覚室

終戦直後、金田一耕助(長谷川博己)は亡くなった戦友の故郷を訪れる。そこは、瀬戸内海に浮かぶ孤島「獄門島」。僧・了燃(奥田瑛二)の案内で島の鬼頭家にやってきた金田一は、そこで美しい女性・早苗(仲里依紗)と出会う。さらには島に似つかわしくない三姉妹の姿も。ある晩、末妹の姿が消える……。鬼頭家を巡り複雑に絡み合う因縁。戦争でトラウマを抱え、心に空いた穴を埋めるために、金田一は取りつかれたように事件を解明してゆく。

※映画会に参加する前にご確認ください※

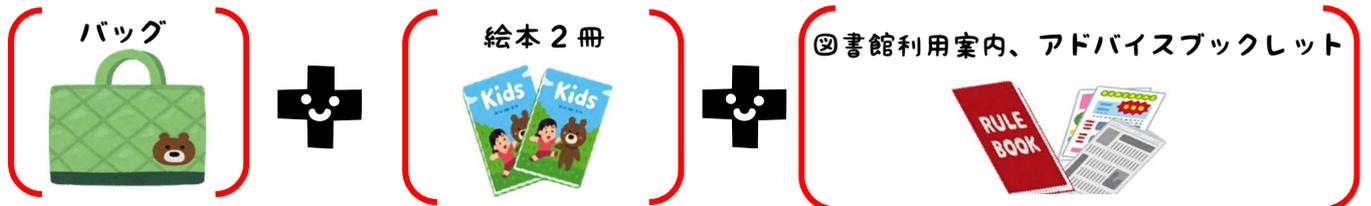


- **事前申込制(先着順・定員 25名)**となります。
中央図書館カウンターまたはお電話でお申し込みください。
- 換気のため、会場の入口や窓の一部を開放します。通常より画面が見づらくなる場合があります。
- ご鑑賞の際は必ずマスクを着用し、入退館の前に手洗いや手指消毒を行ってください。
- 発熱や咳・のどの痛みなどの症状がみられる方のご参加は、固くお断りいたします。
- 感染症の発生状況により、中止となる場合があります。予めご了承ください。



ブックスタートのお知らせ

筑西市の3~4か月健診のお子様を対象に図書館でブックスタートのバッグをお渡ししています。「引換券」を持参し、市内の図書館にご来館ください。



リサイクルフェア 開催中止のお知らせ

毎年ご好評いただいておりますリサイクルフェアですが、今回は中止となりました。リサイクル資料は次回開催に持ち越しいたします。個別にお問い合わせいただいても提供できませんのでご了承ください。

※次回開催については未定です。



疫病と絵画



筑西市が感染拡大地域に指定され、図書館も急遽休館となってしまいました。昨年に引き続き、2度目の休館です。私たちは未曾有の事態に直面しているといえます。このような未知の感染症を人類はどのように乗り越えてきたのでしょうか？今回は「疫病と絵画」という観点から、人類とパンデミックの歴史について考えてみたいと思います。

15世紀イタリアではペストが猛威をふるい、当時のヨーロッパ人口のうち、およそ3分の1が亡くなりました。今回のコロナウイルスを遥かに凌ぐ重大なパンデミックであったといえます。そのような危機的状況の中で流行したものが、生と死を行き交う骸骨たちが**ばっこ**する《死の舞踏》という図像です(図1)。フィレンツェのミヒャエル・ヴォルゲムート(1434-1519)という版画家による作品です。ご覧の通り、骸骨が地上で踊り狂い、人類は<骸骨=死>によって制圧されてしまったかのようです。そこではまさに「死の勝利」が高らかに宣言されています。ペストによって人類は滅亡してしまうかもしれない。そのような危機感と諦念(お手上げ状態)が描かれているといえます。イタリア北部にある山間の町クルゾーネには《死の舞踏》の壁画がほぼ完全な形で残されています(図2)。壁画の多くが積年の風雨に晒され劣化してしまう中、クルゾーネの壁画は色彩の明暗がわかる形で残されています(現物は朱色の箇所が彩色されています)。人々は壁画に希望を託し、未知の疫病に打ち勝つための勝機を見出していたのかもしれない。

ウイルスという「未知の脅威」が私たちの間近に迫っている現在、《死の舞踏》の図像は強く訴えるものがあるでしょう。ウイルスによる「死の勝利」を阻止するためにはどうしたら良いのでしょうか？私たちに何ができるのでしょうか？それは、<骸骨=死>が自分自身あるいは身近な人に襲いかかろうとしていることを肝に銘じて、分別と責任のある行動を心掛けることであるように思います。

[参考文献]

- 小池寿子『死者たちの回廊』(702.0コ)、福武書店、1990年。
- 水之江有一『死の舞踏』(230.4ミ)、丸善株式会社、1995年。



図1 ミヒャエル・ヴォルゲムート《死の舞踏》1493年、版画

図2 作者不明《死の舞踏》(左下部分)、15世紀末、壁画

図書館 Twitter

図書館ホームページ

図書館の情報は
こちら!!



筑西市立中央図書館

〒308-0826 茨城県筑西市下岡崎 1-11-1

Tel : 0296-24-3530

6月の休館日 : 6/7、6/14、6/21、6/28 (すべて月曜日)